

報恩講

ほう おん こう

金沢教区
松扉 覚しゅう ひ さとる

私の祖父は「仏さまの教えに出遇った人は、毎日の生活が報恩講なのです」と先生から教えられたそうです。報恩講の「恩」という字は『ツルの恩返し』と同じ字を書きますが、毎日が恩返しならば大変ですね。はたして報恩講とは、何かの恩返しをすることなのでしょう。

学生時代に「君たちは育ててもらった恩を、家族に返せましたか」と質問されたことがあります。しかし、クラス全体で数人しか手をあげられませんでした。その時「手をあげた人は、恩の深さを本当にわかっていますか。一生かかっても返しきれものではありませんよ」と先生は言いました。手をあげた人が間違っているということではなく、返したつもりでも、ただいた恩は決して返しきれない深いものだと、先生は教えてくれたのです。その大切さに本当の意味で気づいた時、初めて「返しきれない」という気持ちがおこってくるのだと気づかされました。



にきただけや」とこたえてくれました。これは私の地元の方言で「私はないが」とうと伝えにきただけですよ」という意味です。そこに「〇〇してくれたからありがとう」とは違う、もっと深いありがとを感じました。ご恩を返しきれない、申し訳ないという気持ちこそ、そのような自分にも仏さまの教えが届いたという感動が、おばあさんの「南無阿弥陀仏」という声になって現れたのだと思います。報恩とは恩を返すことではなく、このように感動して心からありがとという気持ちが湧き上がってくることです。そして、その気持ちを忘れないように大切にすることが報恩講なのです。

このおばあさんとは、幼いころから色々なお話をしました。その中でも「あ

子どもたちと聞く法話

んちゃん、お金も知恵もあり過ぎるとおもしろいぞ」という言葉が、深く心に残っています。おもしろい“は”恐ろしい“という意味の方言で、「お金や知恵に頼りすぎると、人は大切なものを見失ってしまう」ということです。楽しく生きる道や賢く生きる道ではなく、人が人としていきいきと生きる道におばあさんは出遇っておられました。

みなさんは、いきいきと生きていますか。その難しさを「素の自分が出せない」という言葉で表現してくれた、中学生のお友達がいます。私たちは自分の思い通りにならないこの世界で、ありのままに生きることができるのでしょうか。一生懸命がんばって生きること、世界がひらけたり深まったりします。けれど、その裏側には前しか見えなくなったり、周りの思いに気づけなくなるといった一面もあります。自分の力を尽くして全力投球しても、いきいきと生きることがとても難しいのです。

しかし、あきらめることはありません。そのような私たちのために仏さまがいらっしゃるのだと、親鸞さまは教えてくださいました。親鸞さまがお書きになった『正信偈』という詩の中に「煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」という言葉があります。「人は色々な思いが邪魔をして光を見ることができないけ

れど、それでも仏さまは私を照らしてくださいます」という意味です。同じのちを生きているはずなのに、自分の気持ちによって楽しいだけでなく辛くなってしまう時もあります。だからこそ、どんな時でも光を感じられるように、いのちを喜べるように仏さまの教えがあるのだと、親鸞さまはあきらかにしてくださいました。

報恩講にはみんなで集まって『正信偈』のお勤めをし、親鸞さまの教えを聞きます。そして、生きていく中で本当に大切なことを見失わないように、その教えに自分の生き方を確かめるのです。

蓮ちゃん通信 その②

あかほんくん勤行集

子ども会のお勤めでぜひお使いください。子ども報恩講でもお使いいただけるように和讃も同朋奉讃で2種類（「弥陀成仏のこのかたは」・「弥陀大悲の誓願を」）、御文も2種類（「末代無智」・「聖人一流」）掲載しております。

※お求めは、青少幼年センターまで
お問合せください。

価格 200円

